

本日の学び:「託されるヨセフ」 テキスト:創世記50章15-26節

【理解の手がかりとして】

本課のテキストの前段(50:1-)から文脈をおさえておこう。

父ヤコブが亡くなった後、ヨセフはエジプトの総理大臣として盛大な葬列をもって、父に言われたとおりに、父ヤコブをカナンの地にあったマクペラの洞穴に葬る。以下、その葬りの様子である。

ヨセフはよく泣く、心の柔らかい、優しい人であった。「ヨセフは父の顔に伏して泣き、口づけした」(50:1)というのは、ヨセフの父ヤコブに対する深い愛情を表している。ヨセフはエジプトの総理大臣として、政治的にも細かい配慮ができる人でもあった。ヨセフは僕である医者たちに父のなきがらに防腐処置をするよう(いわゆるミイラ化)に命じた。エジプトでそれを施されるのは位の高い人である。その作業には40日かかったと言われる(50:3)。さらに「70日の間喪に服した」(50:3)とあるが、これは上記の作業に加えて30日間喪に服したということであろう。ちなみに後にアロンが死んだとき(民20:29)、またモーセが死んだとき(申34:8)もそれぞれ30日間喪に服したとある。

喪が明けるとヨセフは、ファラオの宮廷の者に、ファラオへ取り次いでほしいと伝える(50:4)。立場から直接ファラオにももの申せるヨセフであったが、喪が明けたとはいえ、近親者を亡くした者には、何らかの禁忌があって、ある一定期間、直接ファラオに話すことが出来なかったのであろう。その伝言の内容は、父ヤコブの埋葬(遺言にもとづくカナンの地への葬り)についてであった。そしてファラオは許可を下す。

ファラオの許しを得て、ヨセフは父を葬るためにカナンの地へ上って行った。会葬者の行列は、実に盛大なものであった(50:7-9)。時の権力者ヨセフとはいえ、驚くべき盛大さであるが、結果としてイスラエル民族の祖としてのヤコブの葬列に相応しいものとなった。

カナンの地にあったゴレン・アタドで、一行は非常に荘厳な儀式を7日間行った(50:10)。そしてその後は、父ヤコブの息子たちだけで、父が命じたとおり、マクペラの畑の洞穴に葬った。この墓地は、かつてアブラハムがヘト人エフロンから墓地として所有するために買い取ったものであった(23:17-20)。

そうしてヨセフと兄弟たちはエジプトに帰って行った。ファラオに対する「わたしはまた帰って参ります」(50:5)という約束を守るべく。

さて、ここからが本課のテキストに関する内容である。父ヤコブが死んだ後のヨセフたちの言葉とそれに対するヨセフの応答が、15節以下に記されている。

ヨセフの兄弟たちは、ヨセフが兄弟たちに仕返しをしないのは父ヤコブが生きていたからだ、と考えていたことが分かる。逆に言えば、父ヤコブが死んだ以上、ヨセフの兄弟たちは、彼らが昔ヨセフに対して行ったすべての悪に対して仕返しをするのではないかと恐れたのである。

そこで兄弟たちは、直接ヨセフのところへ行って、罪を認め、詫びて赦しを乞うのではなく、まず人を介して、父ヤコブの伝言という形をとって、ヨセフに赦免を願い出る。その父の伝言は作り話だったと思われる。なぜなら、父ヤコブは、その事実(ヨセフを売ったこと)を知らなかったであろうから。

ここで注目したのは、17節の「咎」と「罪」である。「咎」とは「罪となる行為」を指すと言われる。つまり兄弟たちが具体的にやったこと、かつてヨセフを荒野の穴に投げ入れた(37:24)後、ミディアン人の商人たちに彼を奴隷として銀20枚で売り(37:28)、彼が助けを求めても聞こうともしなかったこと(42:21)を「咎」と言い、そのこと全体を指して「罪」であると理解することができる。

17節最後には「これを聞いて、ヨセフは涙を流した」とある。既述のとおりヨセフはよく泣く人であるが、この

時のヨセフの涙の理由につき考えさせられる。それは、兄弟たちが初めてはっきりと、彼らの悪しき行為(すなわち咎)を罪と認め、悔い改めて反省し、罪の赦しを彼に求めてきたからではないか。

この後、兄弟たちはヨセフの前にひれ伏す。彼らがヨセフの前でひれ伏すのはこれで四度目である(42:6、43:26、44:14、そして50:18)。まさにヨセフが若いときに見た夢(37:6-7)の成就がここにも見られる。しかし若いときのヨセフと今のヨセフとでは全く違い、高ぶることは微塵もなかった。ヨセフは自身の経験を全て神の計画に帰すことが出来るようになっていた。人間的にはいろいろな確執があったが、それぞれの人の思いや行動を、悪い思いや行動さえも、神の「多くの民の命を救うため」(50:20)という計画の一部と懐深く受け止めたのである。

こうして長年、兄弟たちが気にかけていたヨセフに対する罪は赦され、兄弟たちは安心したのであった。そうして父ヤコブの亡き後、その12人の息子たちは、イスラエル12部族の祖となっていく。「ここにイスラエル12部族の団結の基礎ができた」(加納貞彦)との評価に見るように、これは歴史的にとっても重要な出来事であったと言えるだろう。

さて、創世記は50:22-26のヨセフの死の出来事をもって綴じられる。ヨセフの寿命は110歳。ヨセフは死に際して兄弟たち(おそらく「イスラエルの民」の意味)に言う。「神は…この国からアブラハム、イサク、ヤコブに誓われた土地に導き上げてくださいます」(50:24)と。さらに「わたしの骨をここから携えて上げてください」(50:25)と。そしてこれらは実現する。後にイスラエルの民がエジプトを脱出するときに、「モーセはヨセフの骨を携えていた」(出13:19)とあるとおりである。さらにその後、イスラエルの人々は、ヨセフの骨をヨセフ一族の相続地に埋葬する(ヨシユア24:32)。

このようにして、創世記はヨセフの死の記事をもって終わる。そして続く出エジプト記に自然に続く形となっている。「ヨセフの死は出エジプト記のはじまりとなりました。やがてヨセフの子孫はエジプトの国で繁栄しますが、ヨセフのことを知らないエジプトの国王が出現し、新しい指導者モーセと全面对決するようになります。…イスラエル民族はエジプト脱出を果たし、やがてその歴史はキリストの十字架の救いにまで発展していくのです。ヨセフの死はモーセの始まりでした。そしてモーセの死は、次の時代の指導者ヨシユアの始まりでもあり、その歴史はキリストの十字架の救いにまで脈々とつながってゆくようになるのです。主のご摂理の中で与えられた地上の生涯を全うし、死を迎える。神のみ許しがなければ雀の一片さえも、地に落ちないことを覚えながら、大きな神の御手の中で死の意味をも確認する。もしかしたら私たち自身すら知らない全く別の意味合いが、私たち自身の死そのものにも込められている可能性があるのです。」(佐藤章)

——神の救いの計画(救済史)の中に、勿体なく位置づけられている私たち一人ひとりの人生(生と死)である、という厳然とした事実を知らされ、身震いさせられる思いである。

『聖書教育』より

「たとえヨセフの功績が忘れ去られる日が来ても、神が必ず顧みてくださるという信仰は奪われることのない遺産として子どもたちに引き継がれてゆきます。」(聖書の学び～ヨセフの最後と託された未来)

【報告・祈りの課題】

1. 一人ひとりの健康と生活、入院・加療中の方々の癒しのために。甚大な大雨被害の能登の人々のために
2. 9月教会学校月間～10/5(土)リーダー研修会のために(午前の部は公開)。斎藤先生のご準備のために
3. 教会墓園拡張工事のために
4. 秋の特伝(10/27)のために～小林洋一先生のご準備、教会の案内葉書作業のため
5. 牧師の対外奉仕のために～28日沖縄バプテスト連盟総会出席、29日那覇新都心教会宣教
6. 9/29(主)CS、主日礼拝(相模原(宣教:江原主事)・会堂(宣教:斎藤協力牧師))、各会、災害対策委員会、社会委員会、クリスマス委員会
7. その他(個々人の祈りの課題)